

竹のイノベーション

さらには、竹の枝葉やチップを、木材の表皮（バーク）と混ぜてボイラーで燃焼し、一部は新電力会社（PPS）として売電し、一部は竹ボードや竹集成材の工場で排熱とし

この町でいま、「バンブーフロンティア構想」が進んでいる。町内に豊富な竹を伐採し、幹材は、建築用ボード「ナンカンボード」や家具などにも使える竹の集成材「BamWood」に、表皮は抗菌効果があるパウダーとして商品化する。

藤安彦、丸光ホールディングス（熊本県玉名市）社長の山田浩之、そして竹のコンサルティング会社、タケックス・ラボ（大阪府吹田市）社長の岡田久幸の3人だ。

仕掛け人は、南関町長の佐藤安彦、丸光ホールディングス（熊本県玉名市）社長の山田浩之、そして竹のコンサルティング会社、タケックス・ラボ（大阪府吹田市）社長の岡田久幸の3人だ。

山田は「2012年秋からプロジェクトの調査を始め、これらから良い表皮が取れ、ビジネスに向いていると分かった。地域循環型で、地元の自然資源を活かしたビジネスにしたい」と期待を込める。

地元の自然資源生かす
山田は「2012年秋からプロジェクトの調査を始め、これらから良い表皮が取れ、ビジネスに向いていると分かった。地域循環型で、地元の自然資源を活かしたビジネスにしたい」と期待を込める。

「厄介者」を価値に変える

熊本県の最北部にある南関町。平家物語にも記述がある筑後・肥後の国境「大津山の関」でも知られる。九州新幹線や九州自動車道が通り、荏原製作所やアイシン高丘などの工場もあるが、町の面積の5割は森林で、のどかな里山の風景が広がる。

一本の竹が14万円に

今回の南関町の取り組みは、これを表皮や幹材、先端部とすべて有効利用することで1本の竹が生み出す価値は約14万円に達する計画だという。さらにこれに売電収入や、排熱利用の付加価値も生まれる。いわば竹の「カスケード（多段的）利用」だ。

町長の佐藤は、「南関町では竹林が増え過ぎて、山が荒れた。イノシシやシカなどの鳥獣被害も深刻だ。山の再生をしたいと前から思っていたが、今回のプロジェクトは、町に豊富な竹を有効利用でき、渡りに船だ」と期待する。丸光ホールディングスは、建設業、運送業、廃棄物処理業などを幅広く営む地元企業だ。建設業は公共事業の減少で先細ったこともあり、新しい事業開発を目指す。山田は新会社バンブーフロンティアの社長にも就任した。



竹のイノベーション

ちかけんの三城賢士（左）と池田親生（写真・柿元 望見）
ちかけんがプロデュースした「竹あかり」



地元の建設業者社長らと現場視察をする佐藤南関町長（左端）

「竹」は伝統的に日本人の暮らしに重要な役割を果たしてきた。だが、高度成長期に多くがプラスチックなどに代替されたこともあり、存在感は薄れた。「放置竹林」の増加で、里山の生態系も乱れている。一方で、竹は日本にとって豊富な資源でもあることは変わらない。忘れられた竹に再び付加価値を見出すイノベーションが、実は日本の各地で進んでいる。

（オルタナ編集長・森 撰、同副編集長・吉田 広子）

バンブーフロンティア構想

